

「不可能性」のモダリティの意味と動詞の体の形態との相関関係に関する一考察

阿出川 修嘉

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

0. はじめに

現代ロシア語においては、動詞の持つ文法的カテゴリーのひとつに、アスペクトの意味を表わす「体」のカテゴリーがあり、ほぼ全ての動詞が完了体もしくは不完了体のどちらかに属するとされている。

この体のカテゴリーは、その文法的カテゴリーという性格上、言語体系内の他の文法的カテゴリーとも相互に関連し合っている。本稿で対象とするモダリティのカテゴリーもそうした文法的カテゴリーのうちの一つである。

一般に、文の持つ特定のモダリティの意味と、その際話者によって選択される体の形態の間には一定の相関関係が存在することが指摘されている。本稿で対象とする「不可能性（невозможность）」のモダリティの意味と、完了体動詞の結びつきもその一つである。

しかし、その一方で同じ不可能性の意味と不完了体動詞が共起する場合もあることも知られているが、この不完了体動詞の用いられる場合について十分には記述が成されていない。そのため、モダリティのカテゴリーと動詞の体のカテゴリーが相互にどのように影響しあっているかについて、体系的な記述が成されているとは言えないというのが現状である。

本稿では、このモダリティのカテゴリーと体のカテゴリーとの相関関係についての体系的記述を目指す第一歩として、現代ロシア語における「不可能性」を表わす形式のうち、否定辞 *не* と叙想動詞 *мочь* の結合によって表わされるものを取り上げ、それと共に起する動詞不定形の語彙的意味、その体の形態に対して考察を加えた。

1. 現代ロシア語の「体」のカテゴリー

1-1. 体の対立；その有標性、無標性

一般に、現代ロシア語における体のカテゴリーは、欠如的対立（привативная оппозиция；privative opposition）¹を成しており、完了体が有標項（маркированный член）、不完了体が

¹ 言語学における「対立（оппозиция）」という考え方は、まず音韻論の分野で Трубецкой に始まったが、それを文法に導入したのは Якобсон である。これらについての詳細な解説及びロシア語の体のカテゴリーとの関連については、Бондарко (1971б: 85-94) を参照されたい。

無標項（неподчёркнутый член）であるとされる。

しかしながら、欠如的対立を特徴付ける際には、形態、意味、頻度数など複数の基準を考えることが出来る（cf. Comrie 1976: 111-122）。

上に述べた体のカテゴリーの成している欠如的対立とは、「意味」の観点からの特徴付けに基づいたものである。すなわち、体のカテゴリーの持つこの文法的対立は、「全一性（целостность）」を示差的な意味特徴とする、欠如的対立である。つまり、完了体は「全一性」を積極的に表わす有標項（特徴表示をするとすれば [+全一性]）であり、それに対して不完了体は、それ自体では「全一性」の特徴を表わすこともある、表わさないこともあるという無標項（同 [±全一性]）であると位置付けられるのである（cf. Бондарко 1971a, 1971b; Зализняк, Шмелев 2000 など）²。

その一方、「頻度数」という観点から有標、無標を特徴付けるとすると、必ずしも意味の上でのそれとは一致しないことがある。

例えば、実際のテキスト内で使用される動詞の体の出現分布を、時制の別を加えて見る場合、過去時制の場合には、頻度数の上で完了体動詞が不完了体動詞を上回るという結果が得られる³。したがってこの場合、過去時制においては完了体が無標項、不完了体が有標項であると特徴付けることも可能である。

1-2. 「体のペア」という概念

伝統的なロシア語アスペクト論では、動詞の意味を考える際に、動詞の「語彙的意味（лексическое значение）」と、「体の意味（видовое значение）」とを便宜的に分けて考える⁴。ロシア語の動詞の意味は、語彙的意味と体の意味の双方から成っていると考えられるのである。

そして、語彙的意味は同一で、体の意味に関してのみ差異がある、二つの形態は、「体のペア（видовая пара）」という概念の下にまとめられる⁵。

例えば、次の文は動詞の体のみにおいて異なる文である：

- a) Он открыл【完了体・過去形・男性・単数】окно.
- б) Он открывал【不完了体・過去形・男性・単数】окно.

² こうした意味の上での欠如的対立は、名詞にも見ることが出来る。例えば、*телка*（メスの子牛）と *телеңок*（子牛）という名詞は、自然性の「メス」という属性を特徴表示すると、前者が [+メス] で、後者が [±メス] となり、欠如的対立を成している。ここには出現の頻度数というものは関与していない。

³ この問題を扱った研究として、Comrie (1976) によって Josselson による研究 (1953) が紹介されている (Comrie 1976: 121)。この Josselson の研究に関して筆者自身は時間的制約のため現時点で未確認である。

⁴ Гловинская (1982) は、動詞の語彙的意味と体の意味とは融け合っていると主張しており (cf. 1982: 47-54)，ここで述べている従来の立場とは一線を画している。

⁵ ここでは典型的な例を用いて最も基本的な説明を行なっている。しかしながら、この 2 つの形態が同一の語の変化形とみなすのか（つまり語形変化的なものなのか）、異なる語であるとみなすのか（つまり語分類的なものなのか）、あるいはその双方の特徴を併せ持ったカテゴリーなのか、という点については学者により諸説提案されており、最終的な解決をまだ見ていない。この問題に関する簡潔且つ導入的な解説は Зализняк и Шмелев (2000: 14-16) を参照されたい。

a) の文は、余程特殊な文脈でない限り、過去のある一時点において生起し完結した状況を表わす（「彼は（その時）窓を開けた」）。これに対して、6) の文は、「（その時ちょうど）彼は窓を開けるところだった【過程の意味】」、「（何度も）彼は窓を開けた【反復の意味】」、「（かつて）彼はその窓を開けたことがあった【過去のある一時点における動作事実の有無の確認】」といった解釈が可能である。ここにも上に述べた完了体の持つ無標項としての性質が現われている。

いずれにしても、この両者は「開ケル」という語彙的意味の点で共通しており、アスペクトに関する部分のみが異なっているため、これらの二つの動詞は体のペアを成しているとみなされる。そして、この完了体、完了体という体の形態の対立は、動詞が不定形の場合（上例の動詞の不定形はそれぞれ、完了体が *открыть*、完了体が *открывать* となる）でも保持されるものである。

2. 本研究の対象、目的；先行研究における記述

2-2. 不可能性のモダリティの意味と動詞の体の形態の関係について

先に述べたように様々あるモダリティの意味のうち、本稿では「不可能性」のモダリティの意味を対象として取り上げるが、現代ロシア語において、「可能性」のモダリティを表わす形式としては、叙想動詞、無人称述語（*можно*, *нельзя* など）、形容詞（*способный* など）、名詞句（*в силах* など）、不定法文などがある（cf. ТФГ 1990: 127）。通常、これらに否定辞が結合することで「不可能生」のモダリティの意味が表わされる。本稿が対象とする、「可能性」の意味を表わす叙想動詞 *мочь* に否定辞 *не* が前置され結合したもの（「否定辞 *не*」+「*мочь* の諸形」+「動詞不定形」）もそのひとつである⁶。

この「不可能生」のモダリティの意味と、完了体動詞が結びつきやすいことについては、度々指摘されている。これについて、比較的詳細に述べているのが Rassudova (1982) である。

Rassudova (1982) は、この形式と動詞不定形が共起する場合には通常完了体が用いられるとする一方で、不可能性の意味は完了体だけにあてがわれているものではないとし、完了体が用いられる場合として以下のような場合を挙げている（1982: 123-126）：

- 1) 動作の完遂への過程（*процесс*）を表わしている場合
- 2) 動作の反復性（*повторяемость*）の意味が前面に押し出される場合
- 3) 動作の持続性（*длительность*）が前面に押し出される場合
- 4) 動詞が完了体の形態しかそもそも持っていないような場合

また、Forsyth (1970) は、「動作それ自体を行なうことが主体の力を超えている時（…【省略—筆者による】… when performance of the action as such is beyond the subject's powers）」に

⁶ 先行研究に共通する問題点として、「不可能性」という概念それ自体に関するより厳密な規定の必要性が残るが、それについて本稿においても未解決である。これについては稿を改めることにする。

完了体が用いられるとして、若干異なった特徴付けによる説明をしている (Forsyth 1970: 242)。

上に見たように、先行研究においては、これらの場合に完了体動詞が用いられるというのだが、いずれの場合も、動詞の語彙的意味に対する視点を欠いているため、包括的な記述であるとは言いがたいものとなっている。

2-3. 本稿で明らかにする事項

上で見た先行研究の内容を踏まえた上で、本稿で明らかにしようと試みる点は次のような点にまとめることができる。

まず第一に、「不可能性」を表わす形式と共に起する動詞不定形はどのような語彙的意味を持ったものなのか。そして、それらの動詞語彙の、体の形態の現われ方はどのようにになっているのか。

そして、語彙的意味の性質に応じて何らかの傾向が見られるのかどうか。語彙的意味と体の形態の間に一定の相関が見られるのかどうかという問題。

更に、完了体が現われるのはどのような場合か、先行研究の指摘は適当なのか、あるいは何らかの別の要因が影響しているのか。

これらの点について確認すべく、データの採集、分析を行なった。

3. 動詞不定形の出現状況

3-1. 本研究で用いたデータについて

以下で本研究に際して収集したデータから、動詞不定形の体の形態の実際の出現状況を見ていくことにするが、ここでまず、本研究において考察の対象とした言語データ（用例）について若干述べておく必要があろう。

今回は、大部分の用例を既存のコーパスからのものを利用した。なかでも、ウプサラコーパス (The Uppsala Russian Corpus) から主に用例を収集した⁷。

このコーパスを採用した主な理由としては、規模は大きくない⁸ものの得られるデータに関して、出典等の情報が示されており、他のコーパスに比して比較的信頼性が高いという点が挙げられる。

このウプサラコーパスに対して、否定辞の *не* と叙想動詞 *мочь* との結合を文字列検索にかけてデータを収集した。動詞 *мочь* を、現在時制では人称及び数に、過去時制では性及び数に応じて変化させたものをそれぞれ検索にかけた。

⁷ 検索に際しては、チュービンゲン大学で提供されているオンラインシステムを利用した。URL は以下を参照されたい：

<http://www.sfb441.uni-tuebingen.de/b1/en/korpora.html>

⁸ 文学作品のテキスト、新聞・雑誌からのテキストから成る総計約 100 万語。なおウプサラコーパスについては以下の URL からも情報を得ることが出来る。コーパス自体もダウンロードが可能となっている。

<http://www.slaviska.uu.se/korpus.htm>

3-2. データの総数など

こうして得られた結果の中から、「не можь」という結合と動詞不定形が共起している例のみをデータとして採用した。

したがって、動詞不定形が共起していない（無い、あるいは省略されている）場合や、動詞不定形の直前に否定辞の **не** が結合している場合（**не можь не**+動詞不定形）は、「不可能性」の意味とは異なるモダリティの意味となるので、データから除外してある。

また、両体動詞⁹については、体の別が形態的に判断できないため、やはり除外した。**быть**についても、その体の別について、あるいはその動詞としての性格についても議論があるため、データとしては相当数得られた¹⁰が、今回は対象から除外した。

その結果、最終的にデータとして採用される例文は、総計 485 例になる。

それでは、「不可能性」を表わす指標である **не можь** の各変化形と共に用いられる不定形の体の形態の分布はどのようになっているのだろうか。

まず単純に、文の時制形式と動詞の体の形態にのみ着目して整理してみると以下のようになる。

時制形式と動詞の体の形態の分布

	完了体	不完了体	総計
仮定法 ¹¹	18 (90.00%)	2 (10.00%)	20
過去時制	184 (72.44%)	70 (27.56%)	254
現在時制	135 (63.98%)	76 (36.02%)	211
総計	337 (69.48%)	148 (30.52%)	485

上表の通り、完了体動詞が多数である一方、ある程度の数の不完了体動詞が用いられていることが分かる。

次節以降で、これら体の形態と動詞語彙との関係に焦点を移して考察を加えていくことにする。

4. 動詞の分類について

4-1. 本研究で援用した動詞の分類について

本研究では、データとして得られたこれらの動詞を分類するにあたり、TCPГ (1999), ЭСС (2002)において提示されている、Бабенко らによる動詞分類を援用した。ここでそ

⁹ 両体動詞（*двувидовые глаголы*）とは、完了体の形態と不完全体の形態が等しいものをいう。一つの形態で完了体の意味も不完全体の意味も表わす。

¹⁰ 存在の意味を表わしているもの、連続として機能しているものを合わせて 103 例が得られた。

¹¹ ここで「仮定法」の扱いとしているのは、動詞 **мочь** の過去形の直後に **бы** が結合しているものである。

の動詞の分類について概観しておくことにしよう¹²。

この分類では、まず、当該分類のごく原初的な、典型的な意味（типовая семантика），当該状況の構成要素（「主体」「客体」など）を示した基本モデル（базовая модель），及び、その分類の基本述語（основные предикаты）が提示される。そして更にこの分類の語彙的なバリエントが列挙されるという形を取っている。

この分類は、かなりの数の動詞を網羅しており、それぞれの動詞が形成する文型などに関する情報が詳細に提示されており、分類に際して筆者の恣意的な要素が介入しにくいとの判断から今回試験的に援用した¹³。

この分類では、まず大きく3つのタイプに分類がなされている。すなわち、「動作と活動（действие и деятельность）」に関するもの、「存在、状態、性質（бытие, состояние, качество）」に関するもの、そして「関係（отношение）」に関するものである（各分類の名称に対する訳語は筆者による試訳である；以下同）。

ここでは仮にこれらを「基本分類」と呼ぶことにすると、これら3つの基本分類はそれぞれがさらに分類され下位分類（階層としては最高4つからなる）を構成している。

この分類にしたがって、今回データとして得られた動詞不定形を分類した。本稿では、分類が煩雑になるのを避けるため、論全体への影響の有無についても考慮に入れた上で、基本分類の下位分類としては下位2つまでの分類を提示している。

4-2. 今回得られたデータとその分類

以下では、今回データとして得られた動詞を、どの下位分類に入れたかについて表の形で示す。

まず、「動作と活動」に関わる動詞は以下のように下位分類されている。

「動作と活動」に関わる動詞

基本分類	下位分類1	当該分類に属する動詞 (今回データとして得られた主なもの)
動作と活動 действие и деятельность	主体の移動 движение субъекта	бежать (走ル), выйти – выходить (出ル), идти (進ム), уехать – уезжать (去ル), ходить (歩キ回ル)
	客体の移動 перемещение объекта	вести (導ク), двигать – двинуть (動カス), поднять – поднимать (持チ上ゲル), вытащить – вытаскивать (引キズリ出ス)

¹² 以下原則的に、ЭСС (2002) の記述に沿って概観していく。TCPГ (1999), ЭСС (2002) の両者における分類の提示方法には、前者が分類の提示の後に動詞を見出しとして提示しているのに対して、後者では、分類及び状況が提示されており、その状況の述部としての動詞という形で動詞が提示されているという若干の差異があるのだが、両者の理論的な基盤は同一である (cf. ECC 2002: 11-35)。

¹³ しかし、この分類では、いくつかの基本的な動詞が収録されていないなどの問題点もある。これらの未掲載の動詞については、今回のデータに現われた場合には分類が出来ないため、保留の扱いをしているが、これについては今後分類を適宜考えていく必要がある。今回保留扱いにした動詞のうち、特に頻度の高かったものは以下のようなものである：

вспомнить – вспоминать, догадаться – догадываться, нарадоваться, обойтись – обходиться, помнить, стать – становиться, удержаться – удерживатьсяなど

	配置, 位置 помещение	собрать – собирать (集メル) ; ставить – поставить (置ク) ; войти – входить (入ル) , пробиться – пробиваться (通り抜ケル) ; сесть – садиться (腰掛ケル) ; привыкнуть – привыкать (慣レル) ; скрыть – скрывать (隠ス) ; разжать – разжимать (開ク)
	客体に対する物理的作用 физическое воздействие на объект	освободить – освобождать (解放スル) , уйти – уходить (去ル) ; вытереться – вытираться (自分ノ体ヲヌグウ) ; пахать (耕ス) ; уничтожить – уничтожать (殲滅スル) , загнать – загонять (追イヤル) ; поделить – делить (分ケル) , поделиться – делиться (分カレル) , оторвать – отрывать (チギリ取ル) ; подняться – подниматься (上ガル) ; тронуть – трогать (触レル) , удержать – удерживать (支エル) ; приладить – прилаживать (取り付ケル)
	創造的活動 созидательная деятельность	исправить – исправлять (直ス) ; сложить – складывать (形成スル) , выстроить – выстраивать (作リ上ゲル) ; написать – писать (書ク)
	知的活動 интеллектуальная деятельность	глядеть (眺メル) , увидеть – видеть (見ル, 理解スル) , заметить – замечать (気付ク) , послушать – слушать (聞ク) ; подумать – думать (考エル) , напомнить – напоминать (思イ出サセル) , сообразить – соображать (想像スル) ; забыть – забывать (忘レル) , запомнить – запоминать (覚エル) ; узнать – знать (知ル, 理解スル) , понять – понимать (理解スル) , постичь – постигать (理解スル) , установить – устанавливать (理解スル) ; решить – решать (決メル) , найти – находить (見ツケル) ; назвать – называть (名ヅケル) , охарактеризовать – характеризовать (特徴付ケル) ; ожидать (期待スル) , предположить – предполагать (予想スル) , представить – представлять (想像スル) ; сопоставить – сопоставлять (対照スル) , сравниться – сравниваться (比較サレル)
	言葉による活動 речевая деятельность	обсудить – обсуждать (検討スル) , ответить – отвечать (答エル) , согласиться – соглашаться (同意スル) , спросить – спрашивать (尋ネル) ; сказать – говорить (言ウ) , объяснить – объяснять (説明スル) , признаться – признаваться (認メル) , рассказать – рассказывать (語ル) ; одернуть – одергивать (タシナメル)
	社会的活動 социальная деятельность	добиться – добиваться (獲得スル) , соперничать (競争スル) ; выполнить – выполнять (実現スル) , сделать – делать (~スル) , провести – проводить (行ナウ) , совершить – совершать (実現スル) ; обмануть – обманывать (ダマス) , отказаться – отказываться (拒否スル) , отречься – отрекаться (拒否スル) , поступить – поступать (振舞ウ) ; трудиться (働く) , работать (働く) ; пользоваться (利用スル) , применить – применять (適用スル) ; выпустить – выпускать (発行スル) ; затормозить – тормозить (停滞サセル) , противоречить (矛盾スル)

次に、「存在、状態、性質」に関わる動詞は次のようなものである。

「存在、状態、性質」に関わる動詞

基本分類	下位分類 1	当該分類に属する動詞 (今回データとして得られた主なもの)
存在、 状態、 性質 бытие, состояние, качество	存在 бытие	начать – начинать (始メル) , появиться – появляться (現ワレル) ; закончить – заканчивать (終エル) , исчезнуть – исчезать (消エル) , остановиться – останавливаться (止マル) ; существовать (存在スル)
	性質の状態 качественное состояние	вызвать – вызывать (呼ビ起コス) , затронуть – затрагивать (悪影響ヲ及ボス) , обидеться – обижаться (侮辱ヲ感ジル) , терпеть (耐エル) , потревожить – тревожить (不安ニサセル) , удивиться – удивляться (驚ク) , успокоить – успокаивать (ナダメル) ; заснуть – засыпать (寝入ル) ; разогреть – разогревать (暖メル) ; измениться – изменяться (変ワル) , распространиться – распространяться (普及スル) , расти (成長スル) ; длиться (続ク)

そして、「関係」に関わる動詞には以下のような動詞が分類される。ここには主体と客体の間の「関係」をめぐる状況を表わす動詞が含まれる。

「関係」に関わる動詞

基本分類	下位分類 1	当該分類に属する動詞 (今回データとして得られた主なもの)
関係 отношение	相互関係 взаимоотношение	заменить – заменять (交換スル) , окупить – окупать (償ウ) , восполнить – восполнять (埋メ合ワセル) ; привести – приводить к чему (~ニ帰着スル) , взаимодействовать (相互作用スル)
	所有 владение	получить – получать (受ケ取ル) , привыкнуть – привыкать (慣レル) , достать – доставать (手ニ入レル) ; иметь (持ツティル) ; удержать – удерживать (保持スル) , уцелеть (残ル) ; дать – давать (与エル) , учить, отдать – отдавать (出ス) , предъявить – предъявлять (提示スル) ; найти – находить (見ツケ出ス) , отыскать – отыскивать (探し出ス) , отвыкнуть – отвыкать (習慣ガナクナル)
	個人間の関係 межличностные отношения	плакать (泣ク) , смеяться (笑ウ) ; поверить – верить (信ズル) , полюбить – любить (好ム) , понравиться – нравиться (気ニ入ル) , сомневаться (疑ウ)

	<p>社会的関係 социальные отношения</p> <p>повлиять – влиять (影響スル) , воспитать – воспитывать (養育スル) , наказать – наказывать (罰スル) , убедить – убеждать (確信サセル) ; обеспечить – обеспечивать (補償スル) , удовлетворить – удовлетворять (満タス) ; поддержать – поддерживать (支持スル) , помочь – помогать (手伝ウ) ; заставить – заставлять (～サセル) , приказать – приказывать (命令スル) ; допустить – допускать (許容スル) , позволить – позволять (許可スル) , разрешить – разрешать (許可スル) ; отстоять – отстаивать (守ル) , стоять (～ノ側ニ立ツ) ; связать – связывать (結ビツケル) ; выиграть – выигрывать (勝ツ) , преодолеть – преодолевать (克服スル) ; руководить (指導スル) , управлять (支配スル)</p>
--	---

次節以降で、それぞれの分類に属する動詞の分類を、その体の形態の観点を加えて見ていくことにしよう。

5. 「不可能性」と共起する語彙の分布と体の形態

今回得たデータを上記の分類にしたがって分類し、「不可能性」を表わす形式と動詞の語彙、及びその体の形態の関係を見ていくことにしよう。

まず、基本分類にしたがって三分類すると次のような割合になる（総計の括弧内は全体の数に対する割合である）。

基本分類ごとの割合

基本分類	完了体動詞	不完了体動詞	総計
「動作と活動」	221	90	311 (64.12%)
「存在、状態、性質」	38	41	79 (16.29%)
「関係」	78	17	95 (19.59%)
総計	337 (69.48%)	148 (30.52%)	485

このように、全体としては完了体動詞が多数を占めており、「不可能性」のモダリティの意味には通常完了体が用いられるという、先行研究によるこれまでの指摘は、数量的にも裏付けられるものであることが分かった。

以下では、それぞれの下位分類の、今回のデータにおける出現率と、その動詞の体の内訳を確認し、その中から出現率の高いものについて特に取り上げて見ていくこととする。

5-1. 「動作と活動」に関する動詞

まず、「動作と活動」の分類の下位分類ごとの内訳は、以下のようになる。なお、表中右端の「出現率」とは、今回データとして得られた動詞不定形の総計（485例）に対して占めている割合を表わしている。

「動作と活動」に関する動詞

基本分類	下位分類 1	完了体動詞	不完了体動詞	出現率
動作と活動	主体の移動／движение субъекта	18	12	6.19%
	客体の移動／движение объекта	9	4	2.68%
	配置, 位置／помещение	10	3	2.68%
	客体に対する物理的作用／физическое воздействие на объект	16	4	4.12%
	創造的活動／созидательная деятельность	9	4	2.68%
	知的活動／интеллектуальная деятельность	89	41	26.80%
	言葉による活動／речевая деятельность	45	4	10.10%
	社会的活動／социальная деятельность	25	17	8.66%

5-1-1. 完了体動詞と不完了体動詞の出現率

ここでは、データ全体を通じてもっとも出現率が高かった、「知的活動」に関する動詞を詳しく見ていく。下位分類の内訳まで示すと以下のようになる。

下位分類 1 : 「知的活動」に関する動詞

下位分類 1	下位分類 2	完了体動詞	不完了体動詞	総計
知的活動	知覚／ситуация восприятия	6	8	14
	思惟／ситуация мышления	5	8	13
	認識／ситуация познания	16	0	16
	理解／ситуация понимания	28	13	41
	決定／ситуация решения	8	3	11
	規定／ситуация определения	7	3	10
	想像及び仮定／ситуация воображения и	17	6	23
	比較／ситуация сравнения и сопоставления	2	0	2
総計		89 (68.46%)	41 (31.54%)	130 (26.80%)

この動詞でも完了体が多数を占めているが、不完了体もある程度現われている。

次に出現率の高かった、「言葉による活動」に関する動詞を見ていく。

下位分類 1 : 「言葉による活動」に関する動詞

下位分類 1	下位分類 2	完了体動詞	不完了体動詞	総計
言葉による活動	言葉による交流／ситуация речевого общения	17	1	18
	言葉による報知／ситуация речевого сообщения	24	1	25
	特徴をもった言葉による活動／ситуация характеризованной речевой деятельности	2	3	5

	言葉による作用／ ситуация речевого воздействия	2	0	2
総計		45 (91.84%)	4 (8.16%)	49 (10.10%)

この分類では、圧倒的に完了体動詞が現われている。

次節では、それぞれの分類について、不完了体が用いられている例を具体的に見ていくことしよう。

5-1-2. 不完了体動詞が用いられている場合

「知的活動」に関する動詞の中からは、もっとも出現頻度の高かった「理解」に関する動詞を取り上げてみよう。不完了体が用いられていたのは次のような例である。

Пока она там то да се, он читает ей вслух Шиллера. В оригинале. Или Гельдерлина. Она ничего, конечно, не понимает и понимать не может, но неважно: важно, как читает — вдохновенно, с переливами в голосе...

Толстая, Т., Петерц, в кн. "На золотом крыльце сидели...", М., 1987,
彼女がそこにいる間やら何やら、彼は彼女にシラーを読み聞かせていた。原文で。あるいはヘルダーリンを。彼女はもちろん、何も理解していないし、理解できない。だがそれは大事なことではない。重要なのは、どう読んでいるかである——意気高らかに、声に変化を加えながら・・・。

Таким образом, объектность естественнонаучного подхода к исследованию человеческой природы с неизбежностью оборачивается объектностью, одномерностью в разработке содержания практических рекомендаций относительно организации взаимоотношений между людьми, которые чаще всего носят обезличенный, "технологический" характер и, естественно, не могут учитывать всего богатства реальных человеческих связей и уникальности личностного содержания каждого.

Три парадигмы в психологии — три стратегии психологического воздействия, Г. Ковалев. "Вопросы психологии", 1987:03,

このようにして、人間性に対する自然科学的アプローチの持つ客観性は、人々の間にある相互関係の組織に関する実用的な推薦の内容を立案する際の客観性、一面性によって化けてしまうのである。この中の「人々」とは、多くの場合、個性のない、「科学的」性格を持っていて、したがって当然のことながら、現実の人間関係の多様さや個々人の内実の独特さを考慮に入れることができないのである。

ここでは、Рассудова (1982) の挙げていた不完了体動詞が用いられる際の要因である、動作の持続あるいは反復という要素は見られない。

一方、「言葉による活動」に関してはどうだろうか。

上に見たとおり、この分類では、圧倒的に完了体動詞が現われている。いくつか現われ

ている不完了体動詞は、 обсуждать（「言葉による交流」）、 рассказывать（「言葉による報知」）、 говорить（2例）である。

Не дослушав, он спросил: — Но вы-то, Александр Леонтьевич, как же? Неужели считаете это возможным? Неизменно носивший вместе с жестковатым, всегда чистым воротничком некую броню официальности, служебной строгости, Онисимов и теперь замкнулся: — Извините, не могу обсуждать этот вопрос.

Бек, А., Новое назначение, "Знамя", 1986:10,
最後まで聞かずに彼は尋ねた。—しかし、あなたは、アレクサンドル・レオンチエヴィチ、一体どうして？まさかこれが可能だとお考えで？固そうな、いつも清潔な襟と一緒に、公的な、職務上の厳格さのようなものを常に持って、オニシーモフは今度も閉じこもるように黙り込んだ。—「すみませんが、その問題については検討できません。」

Однако Алексей Афанасьевич не мог сейчас рассказывать. Его огорчила, расстроила обида, нанесенная Чельшеву. Еще подростком, проходя практику у домен, Алексей уже знал в лицо всегда наспеленного главного инженера Василия Даниловича.

Бек, А., Новое назначение, "Знамя", 1986:10,
しかし、アレクセイ・アファナーシエヴィチはすぐに話せなかつた。彼は、シェルイシェフに与えられた侮辱に、悲しみ、滅入っていた。まだ成年に達していない頃、研修を受けている時、アレクセイはすでに、いつもしかめっ面をした主任技師であるヴァシーリー・ダニーロヴィチの顔を見知っていた。

Сын Александра, живой, смешленый мальчик лет шести, не может или не хочет говорить, очевидно, потому, что взрослые не могут сказать ему каких-то самых важных, необходимых слов .

Завещание мастера. "Известия" 88-07-14

アレクサンドルの息子は、活発で、頭の回転の速い、6つかそこらの男の子だったが、口をきけない、あるいはききたくないのだった。それは明らかに、大人は一番重要で、必要な言葉を自分にかけられないからだった。

А Петр молчал. Он не мог говорить. Он все еще был в песне, в молодости Калины Ивановича и, как молитву, шептал про себя предсмертные слова юного комсомольца: стихотворение.

Абрамов, Ф., Братья и сестры, в кн. "Братья и сестры"

ピョートルは黙っていた。彼は口をきけなかつた。彼は相変わらず歌の中に、カリーナ・イワーノヴィチの若かりし頃にいて、そして祈りのように、若いコムソモール委員の辞世の言葉をつぶやいていた。それは詩だった。

これらの例においても、動作の過程、持続あるいは反復という要素は無いようである。

5-2. 「存在, 状態, 性質」に関する動詞

次に、「存在, 状態, 性質」に関する動詞である。それぞれの内訳は以下の通りとなった。

「存在, 状態, 性質」に関する動詞

基本分類	下位分類 1	完了体動詞	不完了体動詞	出現率
存在, 状態, 性質	存在／бытие	23	25	9.90%
	性質の状態／качественное состояние	15	16	6.39%

5-2-1. 完了体動詞と不完了体動詞の出現率

この中から出現率の高かった「存在」に関する動詞について見ていく。同様に下位分類の内訳まで示すと以下の通りとなる。

下位分類 1 : 「存在」に関する動詞

下位分類 1	下位分類 2	完了体動詞	不完了体動詞	総計
存在	存在, 実在の開始／начальная фаза бытия, существования	5	1	6
	存在の終了／прекращение бытия	8	0	8
	実在／существование	10	24	34
総計		23 (47.92%)	25 (52.08%)	48 (9.90%)

これらの動詞群では、完了体動詞が用いられる率よりも不完了体動詞が用いられる率の方が高くなっています、全体の傾向とは逆転した結果になっている。

この分類では、25例のうち20例を不完了体の形態しかないものが占めている（жить 住む、生キル 9例、сидеть 座ッテイル 4例、сосуществовать 共存スル 1例、существовать 存在スル 6例）。

それ以外の動詞は、рождаться、оставаться (2例)、продолжаться、совпадать である。

5-2-2. 不完了体動詞が用いられている場合

これらの分類で不完了体動詞が用いられているのは以下のようないふたつの場合である。

—Человек не может рождаться на свет просто так, ради удовольствий, —втолковывала Искра, подразумевая под словом "удовольствие" время будущее, а не прошедшее.

Васильев, Б., Завтра была война, "Юность"

ひとは、満足のためにこの世に生を受けることはありえない。イスクラはこう言った。「満足」という言

葉に、過ぎ去った時間ではなく、これからの時間という意味を込めて。

И диалектический материализм **не может оставаться** не только в его гегелевско-классической форме, но даже в форме, доработанной и критически переосмыслинной.

Перестройка и историческое знание, Ю. Афанасьев. "Наука и жизнь", 1988: 09
弁証法的唯物論は、ヘーゲルによる古典的な形態でのみならず、完成され批判的に再解釈された形態でさえも残ることはありえない。

Помню, как я ее встретила, выйдя из ворот больницы, как стояла, бестолково глотая воздух, убитая солнечным светом, а моя подруга держала меня под локоть. Первые недели я прожила у нее. Но это **не могло продолжаться** вечно.

Грекова, И., Вдовий пароход, в кн. "Вдовий пароход", М., 1986,
彼女と会った時のことを覚えているわ、病院の門から出たところで、意味もなく息を吸い込んで、太陽の光にうちのめされて立っていたら、友達が私のひじをつかんだ。最初の数週間は彼女のところで過ごしたわ。しかしそれが永久に続くことはありえなかつたわ。

やはり、これらの動詞でも「過程」、「持続」や「反復」というのは当てはまらないようと思われる。

5-3. 「関係」に関する動詞

最後に「関係」に関する動詞について見ていく。この分類では、動詞の分布は以下の通りとなっている。

「関係」に関する動詞

基本分類	下位分類 1	完了体動詞	不完了体動詞	出現率
関係	相互関係／ взаимоотношение	7	2	1.86%
	所有／ владение	26	3	5.98%
	個人間の関係／ межличностные отношения	5	5	2.06%
	社会的関係／ социальные отношения	44	7	10.52%

5-3-1. 完了体動詞と不完了体動詞の出現率

これらのなかから、もっとも頻度の高い「社会的関係」に関する動詞を見ていく。下位分類は以下の通りとなる。

下位分類 1：「社会的関係」に関する動詞

下位分類 1	下位分類 2	完了体動詞	不完了体動詞	総計
社会的関係	影響／влияние	7	0	7
	補償／ситуация обеспечения	5	0	5
	援助／ситуация помощи	6	0	6
	許可及び禁止／ ситуация разрешения и запрещения	13	0	13
	擁護／ситуация защиты	1	1	2
	従属／ситуация подчинения	0	1	1
	勝敗／ситуация победы или поражения	4	0	4
	強制／ситуация принуждения	4	1	5
	支配／ситуация управления	0	3	3
総計		44 (86.27%)	7 (13.72%)	51 (10.52%)

この分類でもやはり、完了体が多数を占めている。

5-3-2. 不完了体動詞が用いられている場合

この「社会的関係」に属する動詞の中で、用いられている不完了体動詞は、*отстоять – отстаивать*（「擁護」）, *связать – связывать*（「従属」）, *руководить, управлять*（2例）（「支配」）*приказать – приказывать*（「強制」）であった。

これらの動詞のうち、*руководить, управлять*については対応する完了体を持っていない。残りの例については、それぞれ *отстоять – отстаивать, связать – связывать, приказать – приказывать* というように対応する体の形態が用意されているにもかかわらず、不完了体が選ばれている。以下でこれらの例を見てみよう。

Может, ему кажется, что быть трусливым лучше, чем быть, к примеру, подлым? И у него существует какая-то своя градация добра и зла? И ее отцу почему-то выгоднее выглядеть слабаком? Если это так, то ее ничто впредь **не может с отцом связывать**.

ひょっとして、彼には、例えば卑劣でいるよりも、臆病でいることのほうがいいと思えたのだろうか？そして彼には善と悪の濃淡のようなものが存在しているのだろうか？そして彼女の父には、意気地なしに映ることの方が都合がよいのだろうか。もしそうなら、彼女を父と結びつけるようなものは今後ありえない。

А почему не переходят к трезвости те, кто "пьет в меру"? Кстати, в меру чего? Частичной трезвости не бывает, она может быть только абсолютной. Хрониками не рождаются, ими становятся. И в итоге — всегда после "малых доз". Поэтому

общество **не может отстаивать** трезвость с рюмкой в руке.

Пока еще не поздно. "Правда", 87-12-28

ではなぜ「ほどほどに飲む」人は、禁酒しないのか？ところで何の「ほどほど」だろう？部分的な禁酒というのはありえず、禁酒はただただ絶対的なものであるだろう。患者は患者に生まれるのではなく、患者になるのだ。結局、常に「少量」を超えるのである。だから人々は、手にグラスを持っては禁酒を守れない。

Если ты пишешь книгу, создаешь музыкальное произведение, решаешь научную проблему, ты при всем желании не можешь стать диктатором. Только переложив пахоту, книгу, музыкальное произведение, научные изыскания на кого-то другого, ты получаешь возможность превратиться в диктатора. Творческое созидание исключает диктаторство, но от лакейского положения оно не освобождает. Ты приказывать не можешь — некому!

Тендряков, В., На блаженном острове коммунизма,
もし、君が本を書くなら、曲を作るなら、科学上の問題を解決するなら、君はどんなに望んでも独裁者にはなれない。耕すことや、本を書くこと、曲を作ること、学術調査を誰か他の人にやらせて初めて、君は独裁者に変わることを得ることが出来る。創造することは独裁性を排除するが、下男という立場から解放してはくれない。君は人に命令することは出来ないんだ—そんな相手はいないんだ。

ここでも、動作の過程、持続性や反復性が意図されていると判断する積極的な材料は見つからない。

6. 本稿における結論

本稿では、現代ロシア語における「不可能性」を表わす言語形式のうち、**мочь**に否定辞**не**が結合し、後に動詞不定形を伴っているものを対象としてデータを収集し、分析を行なった。

まず、「不可能性」のモダリティの意味と共に起する動詞不定形を、Бабенко らの提案する動詞分類を援用のうえ分類した上で、その分布を調べた。

「不可能性」のモダリティの意味と共に起るのは、以下のようないくつかの動詞である。

「不可能性」と共起する動詞（出現率順）

基本分類	下位分類 1	完了体動詞	不完了体動詞	出現率
動作と活動	知的活動	89	41	26.80%
関係	社会的関係	44	7	10.52%
動作と活動	言葉による活動	45	4	10.10%
存在、状態、性質	存在	23	26	9.90%

動作と活動	社会的活動	25	17	8.66%
存在, 状態, 性質	性質の状態	15	16	6.39%
動作と活動	主体の移動	18	12	6.19%
関係	所有	26	3	5.98%
動作と活動	客体に対する物理的作用	16	4	4.12%
動作と活動	客体の移動	9	4	2.68%
動作と活動	配置, 位置	10	3	2.68%
動作と活動	創造的活動	9	4	2.68%
関係	個人間の関係	5	5	2.06%
関係	相互関係	7	2	1.86%

更に、体の形態の別も考慮に加えると、全体の傾向としては、完了体動詞が不完了体動詞よりも多く、先行研究の指摘を数量的にも裏付けることが出来た。

「不可能性」のモダリティと共に起する不定形における、頻度数の観点から見た場合の完了体の無標性も確認することが出来た。

しかしながら、動詞の語彙的意味の内容に基づいて判断すると、体の形態の出現傾向が一様ではないことが明らかになった。それぞれの分類を体の形態の出現率ごとに並べ替えてみると以下の通りとなる（下表では上で見た出現率の高かった分類のみを取り上げ、完了体が現われる率の高い順に並べてある）。

体の形態の出現率の差異

分類	動詞全体に対する 出現率 (%)	完了体動詞の出現率 (%)	不完了体動詞の出現率 (%)
「言葉による活動」	10.10	91.84	8.16
「社会的関係」	10.52	86.27	13.72
「知的活動」	26.80	68.46	31.54
「存在」	9.90	47.92	52.08

このように、体の形態の出現率は、動詞の語彙的意味の分類に応じて差異が見られる。これらは、完了体動詞の無標の度合い（不完了体動詞の有標の度合い）が異なっていることを示していると見ることも出来る。

「存在」に関する動詞については、不完了体動詞が完了体動詞の出現数を上回っているが、これは、この分類を構成する動詞が、不完了体の形態しか持ち合わせていないことから来るものである。

それ以外の動詞で、不完了体の形態で現われているものについては、現段階ではその体の選択に際しての決定的要因を見つけることは出来ていないが、実際の言語使用の状況を見ると、Рассудова (1982) の指摘のうち、不完了体の形態しか持ち合わせていない動詞の

場合が多く見られたものの、動作の持続性あるいは反復性によって完了体動詞が選択されていると考えられるような例は見られなかった。

しかし、この完了体の使用の条件については、今度更に検証を進めていく必要があると考えられる。

7. おわりに；今後の課題

本研究の抱える現時点での問題点、そして今後の課題、展望は大まか次のようなものになると考えられる。

まず挙げられるのは、データ数の不足である。これについては今後もデータの収集を続けることで適宜補っていく必要がある。

また、今回保留の扱いとした動詞についての再検討が挙げられる。とりわけ *быть* などは頻度数が高かったため、何らかの形で対応を考慮しなければならない。また今回援用した動詞分類の是非についても再検討の余地はあると考えられる。

そして、「不可能性」のモダリティの意味の下位分化があげられる。不可能性のモダリティは、文の主体の具象性、抽象性、主体の人称、そして動詞語彙の内容などの要素と相互に影響を与え合い、それに応じてさまざまな意味を表わす。これらの意味の差異に応じて、不定形の体の形態の振る舞いが変化する可能性は排除しきれていない。

更に、同じ「不可能性」のモダリティを表わす無人称述語 *нельзя* と動詞不定形が結合した場合の、体の形態に対する観察も行なう必要があるだろうと思われる。その場合にも体の形態の振る舞いが変わらないのか否かという問題は今後解決を図るべきもののうちの一つである。

次に、今回のモダリティの意味は、否定の要素を含んでいたため、否定要素の影響について考慮を加える必要がある。一般に体の形態は、否定要素の影響で完了体が用いられやすくなるという指摘が成されている (cf. Рассудова 1982 など)。

それと関連して、「可能性」のモダリティの場合との比較をした上で、動詞語彙の体の形態の振る舞いを比較し、動詞不定形の体の形態の振る舞いが最終的に確定できるものと考えられる。

これらの点を考慮した上で、今後も更にモダリティの意味と体の形態の間にある相関関係を明らかにしていこうと考えている。

引用文献

- Бондарко 1971а — Бодндарко А.В. Вид и время русского глагола (значение и употребление). Л., 1971.
- Бондарко 1971б — Бодндарко А.В. Грамматическая категория и контекст. Л., 1971.
- Гловинская 1982 — Гловинская М.Я. Семантические типы видовых противопоставлений русского глагола. М., 1982.

- Зализняк, Шмелев 2000 — Зализняк Анна А., Шмелев А.Д. Введение в русскую аспектологию. М., 2000.
- Рассудова 1982 — Рассудова О.П. Употребление видов глагола в современном русском языке. М., 1982.
- ТСРГ 1999 — Толковый словарь русских глаголов: Идеографическое описание. Английские эквиваленты. Синонимы. Антонимы. Под ред. проф. Л.Г. Бабенко. М., 1999.
- ТФГ 1990 — Теория функциональной грамматики. Темпоральность. Модальность. Л., 1990.
- ЭСС 2002 — Русские глагольные предложения. Экспериментальный синтаксический словарь. Под общ. ред. Л.Г. Бабенко. М., 2002.
- COMRIE, Bernard. 1976. *Aspect. An introduction to the study of verbal aspect and related problems.* Cambridge: Cambridge University Press.
- FORSYTH, J. 1970. *A Grammar of Aspect. Usage and meaning in the Russian verb.* Cambridge: Cambridge University Press.
- JOSSELSON, H.H. 1953. *The Russian word count and frequency analysis of grammatical categories of Standard Literary Russian.* Detroit: Wayne University Press.